

基調講演

デジタルアーカイブによせる夢

宮 地 正 人

国立歴史民俗博物館

文献史学の研究者として、長年東大史料編纂所（2001年8月迄）の仕事をやってきた私も、もし画像も併用して研究できればなあ、と思うことが時々あった。しかしカラー資料の使用自体が困難だったこともあり、夢の話として放置しておいた。しかし、90年代に入ると、コンピューターの急速な進歩とともに、大量のデジタルカラー画像が容易に利用可能となり、しかも瞬時の検索機能まで具有するという、夢が現実になったのか、と錯覚するような時期が到来した。以下で述べることは、このような錯覚にとりつかれた私の模索の物語りであり、そこでの中間的総括、そしてまだ見はてぬ夢についてである。

一般の人間は文字からは入らない、視覚から入る。これは現在だけの話ではない。私の専門とする幕末維新期においても然りである。それを文字史料だけで研究しようとするから、歴史の香りが稀薄となる。このような考えを共有する職場の異なる友人達と、絵画情報史研究会なるものを建ち上げたのが1992年、93・94の2ヶ年間、トヨタ財団の援助を受け、「幕末・維新期の風聞集等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究－民衆の情報収集・分析・活用に関する研究－」をおこなった。具体的にいうならば、錦絵、摺物（一枚摺ともいわれる単色摺りの画像資料）、そして当時の人々が政治社会情報を記録した風説留中に写されている画像情報の三種に関し、主要な所蔵機関を調査・撮影して目録をとり、画像のデジタル化とその大量処理を図るという計画である。

その成果は、94年11月、トヨタ財団助成研究報告書として発表した。錦絵調書8,600枚、整理済み摺物1,500点、風説留中画像資料3,100点である。ただし、この際の画像のデジタル化は、時間的制約と技術的限界から、その後に利用出来るものは作成出来なかった。

この三種の画像のうち、第一に仕事を前に進めたのが摺物資料の整理であった。1995・6・7の3年間、文部省の科学研究費補助金基盤(C)(2)の援助をうけ、「幕末維新期摺物（いわゆる瓦版）総合編年目録作成のための基礎的研究」を、トヨタ財団援助期の資料蓄積を土台におこなったのである。補助金の多くは、摺物資料の撮影・焼付け代と調査旅費であった。

この仕事をおこなっていく上で大きな助けとなったのが、97年4月より、編纂所に附置された画像史料解析センターであった。安定した予算がそれなりに付けられ、短期

的で単発的な研究におわらない体制がとれることになったとともに、デジタル化の問題を常時相談し援助してもらう組織が建ち上がったことを意味したからである。

この摺物科研は、98年3月、6,184点の摺物資料のすべてに、年月日、表題、版型、数量、書誌事項、形態分類（9つに分類）、内容分類（①火事、②自然災害、③病氣・医療、④暦、⑤祭礼、⑥政治社会変動、⑦諸営業、⑧市井雑事、⑨信仰・行楽・名所図絵、⑩文芸・芸能・スポーツ・教育・出版・教化、⑪芸居・浄瑠璃・歌謡、⑫相撲、⑬芸娯妓、⑭歴史、⑮常識・娯楽・遊技・地図・食事の15分類）、旧国名、所蔵情報を付した「摺物総合編年目録」をセンターから刊行することで一段落した。ひきつづき東大図書館所蔵の物産学者田中芳男旧蔵の「摺拾帖」18冊の目録化をおこない、3,347点を追加した「目録」（第二稿）を2000年7月、センターから刊行した。

「目録」に掲載した摺物に関しては、98年10月、その複製の公開を編纂所で開始し、また同時期、「目録」の諸情報をインターネット上で一字検索をおこなえるようにした。収載摺物情報は16所蔵機関にわたっているため、現物の確認は各機関に赴いておこなってもらうほかはないが、編纂所所蔵分については、書誌情報にデジタル画像をつけ加える方針を決め、その担当者にあとの作業を依頼した。

トヨタ財団援助期に開始した仕事の内、第二に解決出来たのは、風説留中の画像資料目録作りであった。98年度は、この作業をセンターでの仕事の中心に据え、99年3月、「風説留中画像史料一覧（稿）附：幕末維新时期民衆諷刺目録」を刊行した。7,600点の画像資料等を編年化し、1点毎に年月日、表題、写・木版・銅版等の版型区分、出納番号及び備考の情報を賦与したものである。調査した所蔵機関は蓬左文庫、史料編纂所、国会図書館、早大図書館、都立中央図書館、三井文庫、東大図書館、刈谷市立図書館、東北大狩野文庫、京大図書館及び盛岡市中央公民館の11機関であり、現在する大部の風説留の調査はこれによってほぼ網羅出来たと思っている。この書誌情報のデジタル化は、各資料の表題がそれぞれ別箇の独立したものであり、キーワードを使用して網をかけてもあまり意味がないと判断し、あえておこなわなかった。ただし、それぞれの画像はいずれもユニークなものであり、編纂所のものだけでも、デジタル画像を賦与すべきだ、とは思ったが、次に控えている仕事を考えると、より道する余裕はないと断念した。なお、風説留画像の複製は2000年9月より、編纂所で公開を開始した。

第三に仕事の決着をつけたのが錦絵画像であった。錦絵画像に関しては、当初から冊子目録は作成せず、インターネット上での書誌情報及び画像情報の調査・検索システムの開発を目指した。この仕事では、出発時からセンターの援助なしでは、一歩たりとも前進させることは出来なかったのである。書誌情報抽出の原則は、画像から読みとれることの出来る全情報の文字表現化であり、検索を容易にするため、24種の形態分類、265の内容詳細分類をおこなった。例えば中項目の災害は、自然災害、地震、火事、消防、水害、火山、落雷、飢饉の8つの小項目にわけることとした。

あと一つ実現しようとしたことは、錦絵画像は、それぞれの所蔵機関で建ち上げるほ

かないので、相互の機関がおたがいにそれぞれの書誌情報、画像情報に容易にアクセス出来るシステムをつくることであった。

1997 年度は編纂所所蔵錦絵の書誌情報調書作成とデータベースづくりを関係者と共におこなった。点数は 762 点である。98 年度と 99 年度の両年は、静岡県立中央図書館所蔵の上村翁旧蔵錦絵の書誌情報調書作成に従事した。総点数は 2,918 点である。図書館側は、画像をインターネットに建ち上げる作業をおこない、編纂所はデータを図書館側に提供し、その過程で編纂所側からも自由にアクセスするシステムをつくった。双方向型錦絵 DB と命名した所以である。このような構想をもとに、2000 年度から 2001 年度にかけては、横浜開港資料館所蔵錦絵（941 点）、鹿児島県立図書館及び黎明館の所蔵錦絵（合せて 230 点）の書誌情報調書を作成しデジタル化した。

93・94 両年のトヨタ財団援助期には、その計画の中には含まれていなかったが、幕末以降の古写真、とりわけ人物古写真は、きちんと書誌情報を賦与しさえすれば、非常にデジタル・ライブラリーにふさわしいものとなることが私にも理解されてきた。従って、98 年度からは関係者と古写真 DB 作成のグループをセンター内に組織し、最初に編纂所に所蔵されている幕末維新期の各種アルバム資料、次に借用してきた佐賀関係官僚外交官中野健明旧蔵の人物古写真（主に外交官時代のもの）、ついで 1895（明治 28）年に創刊されたグラフィック総合雑誌『太陽』の人物古写真の DB を作成していったのである。これは古写真 DB として現在は編纂所のホームページで見ることが出来る。

私は、2001 年 9 月にこの歴博に転任したため、史料編纂所でのデジタル・アーカイブ作りの仕事とはそこで切れたが、ここ歴博にも数千点の錦絵及び相当数の摺物資料が所蔵されていることが次第にわかってきた。なんとか編纂所の経験とその間蓄積してきた道具類を活用しながら、歴博の仲間達と楽しみながらデジタル化と情報公開の仕事を進めたいと思っている。

この間の経験で、一番強く感じたことは、短期的視野では決して事は解決しないということである。短くて 5 年、出来れば 10 年というきちんとしたプランが不可欠となる。

第二は、集団の仕事だ、ということである。個人レヴェルの仕事では決してうまくいかない。

第三は、画像はそれぞれの所蔵各機関がたちあげなければならず、その相互の信頼と提携なしには、ライブラリーは絶対に出来ないということである。更にその際には、機関が相当の力量を有していない限り、夢をいだいていても実は結ばない、という客観的事実にも目をつぶることは出来ないであろう。